

実に、不思議というよりほかはない。

望月詩史

奨励者紹介[もちづき・しふみ]

同志社大学法学部准教授

[研究テーマ] 日本政治思想史

「なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。」

(マタイによる福音書 6章 28—30 節)

法学部の望月詩史です。本日は、「実に、不思議というよりほかはない。」と題して、お話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、私の専門は、日本政治思想史です。特に、近代日本のジャーナリストに関心があります。例えば、今日取りあげる石橋湛山、同志社とゆかりのある徳富蘇峰、さらに、自由主義者として名高い長谷川如是閑です。中でも、石橋の思想に最も興味関心を持っています。ちなみに、本日の聖書朗読で取り上げた箇所(マタイによる福音書6章 28 節—30 節)は、石橋が好んで度々自らの論説に引用していたものです。

ところで、チャペル・アワーでは、さまざまな方がお話をされています。事前に伺ったところでは、①聖書に関するもの、②同志社の建学の精神、ゆかりのある人物などに関するもの、③自身の経験や思索から学生に伝えたいもの、に分類されるようです。私は、聖書について専門的知識を持ちませんし、また、同志社についても、例えば徳富蘇峰に関心はありますが、独自の見解を持ち合わせておりませんので、自らの経験に基づいてメッセージをお伝えすることにします。

それでは何について話をするのかというと、「人との出会い」が人生に影響を与える、というものです。とはいえ、他の人が経験したことのない、何か特別な経験を有しているわけではありません。また、ここにおられる皆さんも、同じような経験をお持ちかもしれません。けれども、誰と出会い、それが人生にどのような影響を与えたのかは、人によって異なります。その点で、私の経験をお話しすることにも、何らかの意味や意義があるように思います。

さて、「実に、不思議というよりほかはない。」という言葉は、石橋湛山が発したものです。石橋は、戦前はジャーナリスト、戦後は政治家に転身し、短期間ではありますが、首相も務めました。時期は1956年12月から翌年2月です。鳩山一郎と岸信介の間に当たります。短期間に終わったのは、彼の健康問題に関わります。近年では、高校の歴史教科書にも石橋の名前が載っており、私が学部生だった20年前よりも、知名度は向上しているように思います。また、今年は「没後50年」ということで、メディアでもしばしば「石橋湛山に学ぶ」と題する特集が組まれています。

その石橋が、1965年10月23日、山梨県立甲府第一高等学校で大島正健彰徳碑除幕式が開催された際、来賓として祝辞を述べました。大島は、キリスト者であり、教育者でもあった人物です。札幌農学校の第一期生であり、W・クラークの教えを受けました。同志社でも一時期、教鞭を取っていました。その後、山梨県立尋常中学校に校長として赴任しました。石橋は、大島が赴任した時、在学していたのですが、それは彼が2度も落第していたからです。祝辞の中で石橋は、2度も落第したことで大島先生に出会うことができた。そして、札幌農学校におけるクラークの教育方針、具体的には、細かい校則を設けず、ただ「紳士たれ」(Be gentlemen)とのみ伝え、「紳士は自分でやっていいこと、やってはならないことを判断できる」と語ったというエピソード、また、キリスト教、聖書話を聞き、それらが自分に大きな影響を与えた、と語りました。事実、石橋は聖書を読み、度々自分の論説にも引用していました。中でも、先ほど朗読した箇所を好んでいました。そもそも、石橋は仏教の家に生まれました。父親は日蓮宗の僧侶であり、後に日蓮宗総本山久遠寺の法主になります。また、育ての親の望月日謙も同様に日蓮宗の僧侶であり、後に久遠寺の法主になります。石橋の思想のバックボーンに仏教、日蓮宗があることは明らかです。その石橋は晩年、日蓮の遺文集と聖書を枕元に置いていました。大島との出会いが、非常に大きな影響を石橋に与えたことがよくわかるエピソードです。

石橋は大島との思い出を語る途中、急に沈黙しました。聴衆の中には、石橋が体調を崩したのではないかと心配した人もいたようです。沈黙後にやっと口にしたのが、「実に、不思議というよりほかはない。」との言葉でした。つまり、一般的に落第することは褒められたことではないけれども、自分は2度落第したからこそ、大島先生と出会い、その後の人生に大きな影響を受けた。このことは、不思議としか言えない、ということです。

私と石橋湛山

さて、私は、甲府一高在学中に石橋の存在を知りました。学園祭の企画で壁新聞を作成することになった際、「母校の著名人」欄を担当したことがきっかけです。この著名人の中の一人が石橋でした。当初は、「母校の先輩に首相がいたんだ」という程度の理解でした。しかし、石橋のことを調べるにつれて、徐々に関心が高まり、そして、大学進学後、石橋について勉強してみたいと思い始めました。

ちなみに、私が甲府一高に進学したのは、伝統行事である「強行遠足」に惹かれたことが理由です。この行事は、男子の場合、22、23時間の間に約100キロを歩きます。もしかしたら、「時代錯誤の行事だ」と思われるかもしれませんが。では強行遠足を知ったきっかけは何かというと、私の祖父が関係しています。祖父も同校の卒業生であり、強行遠足の賞状を額に入れて飾っていました。祖父の時代には、一定の距離に達すると賞状を貰えたようです。私が中学校時代に賞状に気付き、「これは何」と祖父に聞くと、祖父は強行遠足の思い出を誇らしげに語った記憶があります。祖父が強行遠足を良き思い出としていなければ、私が母校に進学することはなかったでしょう。実際に、強行遠足に対して全員が良き思い出としているのではないので、思い出したくもない過去になっていれば、祖父が賞状を飾ることはなく、また、その思い出を私が聞く機会もなかったでしょう。これも不思議なことですし、何かの縁を感じます。

私と恩師

さて、私は2001年4月に法学部政治学科に入学しました。当時、1・2年次生は京田辺キャンパスを、3・4年次生が今出川キャンパスをメインとしていました。現在は、文系が今出川キャンパスに戻りましたので、皆さんはこちらの科目を履修すれば卒業できます。

1年次生の春学期、私は今出川で開講していた「日本政治」を受講しました。主に3・4年次生が受講していましたが、1年次生でも受講が可能でした。シラバスを読み、内容に関心を持った私はこの科目を履修しました。この科目を担当していたのが、西田毅先生です。テーマは「戦後日本のリーダーシップ」であり、毎回、1人もしくは2人の戦後の首相を取り上げていました。

この「日本政治」の中の一回で石橋湛山が取り上げられました。わずか2ヵ月しか首相を務めなかったにもかかわらず、一回分を石橋に充てたのは、ジャーナリスト時代の実績を評価されていたからです。先生は、石橋は首相や政治家としての実績は確かに目立ったものがないかもしれない。しかし、彼の本領はジャーナリスト時代にあるとして、その実績を紹介されました。「関心を持っていた石橋湛山とはこういう人物なのか」と詳しく知ったのがこの時でした。

実は、この年、西田先生が学部の専門科目を担当される最後の年度でした。翌年以降は、ゼミや特殊講義の担当になりました。科目は続いたと思いますが、担当者も変わり、内容も変わったはずです。そのため、もし私がこの年に受講していなければ、西田先生が担当する「日本政治」を受講する機会はありませんでした。ここでも、不思議な縁を感じます。

石橋が取り上げられた回の授業終了後、先生に石橋に関心がある旨をお伝えすると、開ロ一番、「お国は甲斐の国ですか」と言われて、驚いたのを今でも覚えています。動揺しつつ、「甲斐の国…、はい、山梨です」と答えました。先生は、「湛山は興味深い人物です。是非、勉強なさい」と言われました。当時の私は、先生のこの一言を、石橋を勉強することに対して背中を押されたと理解しました。もしかしたら、それは私の勘違いだったのかもしれませんが（笑）。ただ、今振り返ると、その勘違いが、私の石橋研究の出発点、原点になりました。その後、松尾尊兌編『石橋湛山評論集』（岩波書店、1984年）を購入し、『石橋湛山全集』（東洋経済新報社 1970—1972年）も少しずつ買いました。また、西田ゼミに入り、ゼミ論文では石橋を取り上げました。ただ、やり残した気持ちがあり、その旨を先生にお伝えすると、大学院進学も選択肢の一つであると助言をもらいました。最終的に大学院の修士課程に進学し、先生の指導を受けました。修士修了と同じタイミングで先生は定年退職を迎えられました。元々、修士論文を書いた後は、地元の山梨に戻って就職しようと考えていましたが、この時も、くすぶり続けるものがありました。そのため、悩んだ末に、博士課程に進学し、西田先生の後任であり、なおかつ、先生のお弟子さんでもある出原政雄先生のご指導を受けました。

定年退職後も西田先生には、大変お世話になりました。先生の幾つかのお仕事に関わったり、また、先生が中国の西安交通大学の先生とつながりがあった関係で何度か中国旅行に同行したりしました。ある時の旅行では、夜行列車に乗る機会がありました。夜行列車が好きな私は、車内で滔々とその魅力を先生に語りましたが、翌朝、先生が一言、「夜行列車は疲れますな」と漏らされ、「昨晚ははしゃぎすぎたな」と反省しました。今では懐かしい思い出です。

残念ながら、2021年7月、先生がお亡くなりになりました。あまりの突然のことでした。2020年のコロ

ナ以降、お会いするのを控えており、この間、メールでのやりとりが続きました。亡くなられる一カ月前にもメールがあり、執筆中だった海老名弾正の評伝の原稿について進捗状況が書かれていました。先生のご健在ぶりを確認したばかりでした。体調を崩されたという連絡を受けてから、約一カ月後に亡くなられました。

実を言うと、先生が亡くなられてから約2年が経ちますが、これまで先生の死ときちんと向き合うことができていませんでした。しかし、先生が亡くなられたこの7月に、先生との思い出を語る機会が与えられたことに、不思議な縁を感じます。

おわりに

今回、「実に、不思議というよりほかはない。」と題してお話をさせていただきました。本当に、人生とは、実に不思議なことばかりです。今日紹介した人物との出会いや出来事が何か一つでも欠けていれば、今ここに私が立って、お話しすることはなかったでしょう。中でも、石橋に興味を持っていた私に、西田先生が、「石橋は面白くない。別の人物を勉強しなさい」と言われていたら、私が石橋を研究することはなかったかもしれません。しかし、先生は私の背中を押してくれました。もしかしたら、先生は私の背中を押すという意識を持たれていなかったかもしれませんし、私の単なる勘違いかもしれません。でも、私は背中を押されたと受け止めました。そのおかげで、石橋研究に取り組むことになり、今に至ります。今日、色々な縁を紹介しましたが、今の私があるのは、2001年の西田先生の一言だと再確認しました。

こうした自身の経験から、何気ない一言が誰かの人生に大きな影響を与えることを改めて皆さんにお伝えしたいと思います。発する側にとっては何気ない一言でも、受ける側にとっては大きな影響を受けることがあります。私の場合、それが西田先生の一言でした。もちろん、一言が悪い方に作用することもあります。私は学生と話をする際、可能な限り、自分の発する一言にも意識を向けたいと思います。

世の中には分からないこと、不思議なことが多いです。それは人間が不完全な存在だからだと思います。不完全な存在ということは、自分が正しいと思っていても、間違っている可能性があるということです。だからこそ、異なる意見や価値観を持つ他者に対して寛容でありたいと思います。残念ながら、自分の研究について、「自分の考えが正しいんだ」と思い込んだり、驕りが生じたりすることがあります。こういう時は、「人間は不完全な存在である」ことを忘れかけているのだと思います。この点を常に意識して、教育者として、また、研究者として、今後も活動していきたいと思います。

駆け足気味のお話となりましたが、私の経験が何かお役に立てれば幸いです。どうもありがとうございました。

2023年7月5日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録